

## 2002年10月 堂倉谷登山記録

姫路岳友同人会

参加メンバー：吉田、水守、西本

行程：

10/4 高砂(21:40)～(1:40)大台ヶ原駐車場

10/5 大台ヶ原P(7:20)～(8:00)日の出ヶ岳～(9:10)堂倉小屋(9:20)～(9:50)堂倉滝(10:10)～(11:10)堂倉谷上～アザミ谷出合(13:10)～堰堤(14:15)～林道(15:10)～二又(16:20) ビバーク

10/6 二又(6:50)～石楠花谷出合(7:25)～(9:15)堂倉山～(10:15)尾鷲辻(10:45)～(11:10)P～(16:30)高砂

今年最後の沢登りに大台ヶ原の堂倉谷を選びました。 前回の西横川が水量の少ないルートだったのに対し、こちらはいくつもの豪快な滝を持つ超有名な沢。 9/14 夜に高砂出発。「紅葉には少し早い」「もう水は冷たいだろうな」「天気予報では6日午後から崩れるらしい」などと期待にワクワクしながら一路大台ヶ原駐車場へ。 車酔いに耐えてたどり着いた駐車場には、生まれて初めて見るような満天の星空が広がっていた。早速テントを張り、睡眠薬代わりの酒を飲み、明日に備えて寝袋にもぐりこんだ。 軽量化のための薄い寝袋のせい、寒さで何回も目を覚まし、沢の中でのツェルトビバークが思いやられる。

翌朝は天気予報どおりの雲ひとつ無い快晴。 日ノ出ヶ岳の山頂経由で堂倉滝まで一気に下る。 そもそも登る前にまず下るといのは通常は無いパターンで、堂倉滝についた時点で足は棒のよう。 よくマラソンの中継で「下りで足があがる」というが、この事だろうか。 私が高校時代に来た思い出の山。 素晴らしい大杉谷の景観は当時のままでした。 大杉谷沿いを進み次のつり橋の所で右の斜面にある道を登り始めたものの、整備された道でこれが滝の巻き道とは思えず引き返す事に。 来た道に戻りながら途中の堰堤の所に踏み後を発見。 ここに違いないと登り始めたものの結構な急斜面。 慎重に登っているといつのまにか登山道に出て、思わず「ははは」と笑ってしまった。 さっき途中まで登った道ではないか。 しばらく登って現れたモノレール？跡の反対の斜面を下りようやく堂倉滝の上部にたどり着いた。 既に一時間が経過している。 水量豊富な滝の連続、深い緑色の滝壺や淵に、「きれいな水だな」「夏だったら思い切り泳ぐのに」「この滝壺はむちゃくちゃ深いぞ」「こんな大きな沢登りは初めて」などと各自感動しながら、貸切り状態の沢を満喫しました。 途中一箇所だけロープを使ったものの、快調に進む。 午後3時を過ぎると、今までばしゃばしゃと水の中を進んでいた吉田が水を避けて歩き出した。 どうやらビバーク地に付く前に服を乾かしたいらしい。 鉛のように重い足で今日の目的地二又に辿り付きツェルトを張り、集めた枯れ枝に火がついた頃にはすっかり暗くなっていた。

翌朝、食事の後ツェルトを撤収し行動開始。 少し雲が出てきたものの快晴。 少し行ったところで吉田が「あー」。 どうやら朝一番から水の中に入らねばならない模様。 途中、ちょっとだけしょっぱい滝も有ったものの順調に進み、石楠花谷をしばらく行ったところでどちらが本流か分からない分岐点に着いた。 右だろう。 と小さな滝を登り始めたものの意外と水量が少ない。 休憩する間にやはり左かなー。 さんざん迷った挙句、左を選択し、少し脆い滝を登る事にした。 滝上をしばらく行くと水は涸れ、ふと周りを見ると右手のほうに大きな滝が見えた。 うーん、やはり右だったか。 と思いつつしばらく進むと、尾根沿いの登山道に出た。「ここを少し登ったところが堂倉山だな」というと「えー」という返事。「あそこより上は大した事ないらしい」「記録にも林道までで戻っているのがあった」「まあほとんど登ったしいんじゃない」と適当な事をいいつつ前に進み尾鷲辻経由で駐車場に戻った。「こんなしんどいところ二度と来ないぞ」と考えていたものの、又来る理由が出来てしまった。 途中休憩した道の駅では、三人とも足の筋肉痛でロボットのよう。 疲れた体に鞭打って、一路高砂へ。

